

衝 撃 と 教 訓 (※1)中第 31 回卒 渡 邊 競 (※2)

〈入学試験と中学 1～3 年生〉

昭和 3 年、相馬中学校受験生として、小学校での勉強は至ってお粗末で、口答試験があるというので、課外勉強をした覚えがある。農村の経済状態が芳しくないので、受験生は 1 学級 5～6 名だった。私も例に洩れず、9 歳上の兄が安月給から助ける約束だった。

ピカピカ徽章の帽子に新しい服と皮靴の登校姿は面映ゆい存在だった。学校にも馴れて 1 学期の定期試験があり、成績発表は全校生徒の控室である。中学校中途退学の長兄は、農事の手伝も殆どせずだったのに、不勉強の結果がはっきり、がた落ちだったのである。これに凝りて、朝の予習・帰宅後の復習をかなり頑張るようになった。

秋の気配を感じずる夕刻、机に向かっていると鈴の音とお経らしい声、小桝にお米を盛って出ると、入口の柱にかけた「生徒札」を指してしげしげと見て「君のお父さんは仲々の学者だな」と一言、軽く頭をさげて立去った。そう言えば、父親の本棚には、古めかしい「三国志」や著名作家の小説本・月刊誌キングなど、軽く埃をかぶっていた。新聞も取っていたし、農業人としては地方の文化人だったかも……お陰で書き方の練習用やはな紙、包紙に使われ、内外の状況にも関心を持っていて、時には家の者に話していた覚えがある。

渡邊家は嵯峨天皇の後裔、僕は相馬生まれの摂津守渡邊競だったのである。それは青砥藤網の逸話を話してくれた。国語担当青砥三男 (※3) 先生は「おい、摂津守渡邊競!!、次を読んでみい」とよく指名してくれたもので、先の托鉢坊様の一言を理解、因みに初代摂津守は眉目秀麗にして文武両道に秀でた海運関係総取締役だったとか、この子孫には競と読ませる名字もある(姓氏録)ということで、不勉強の方はぼつぼつ改善されたものゝ、その旨くは虎の皮、これからも頑張るつもりだが……。

〈将来への設計〉

中学 3 年ともなれば、そろそろ就職か進学かを考えねばなるまい。世界的経済恐慌は昭和 5 年日本に波及し、就職はまゝならず私達の心を暗くした。上級学校への受験資格が出来る 4 年生は進学目標をきめねばならない。

私は家庭の事情から、出来るだけ官費の学校で、確実な将来性のある適当な職業を選択しようと思った。満州事変など勃発した時勢なので、滅私奉公の士官学校とも考えたが、自分の成績ではとてもと諦め、海外雄飛とまでは行かなくとも、外地の教育に尽くすため官立京城師範学校を選んだ次第である。

卒業直前昭和 8 年 2 月、陸軍大尉で数学担当の今野侃 (※4) (組主任) 先生から「東北人の欠点と心掛」について講話があった。要約すれば「東北人のズーズー弁は冷かされたり馬鹿にされたり、従って対話が少なく、社交性に疎く上司に認められず、立身出世の妨げになることが多い」というもので、ゆめゆめ怠らず努力せよ……と。わたしはこの教訓を体し、明朗快活をモットーに、積極的に楽しく会話が出来たと自負している。

〈時には茶目つけも〉

先輩達の登校姿は、それぞれ真面目黙々と歩いていたようだが、私共は数人の集団登校で、路上でキャッチボールを時間までやっていた。女学生も通る県道である。ボールが勢い余ってか日傘をこわしてお互にベそをかいている姿もあった。

2～3人の自転車通学生が来ると、横一列になってベルも聞こえない振をしている所へ、勢のよい自転車が誰かの股ぐらに突っ込んだり、又、西山杉林の道に焚火をしていると、1人では駄目でも3人以上集まれば、キャッキッと通り過ぎる女性に喝采!!をした。

母校大野小学校先生チームと野球試合を度々やったことも忘れられない思い出である。捕手と一塁手の本選手になった荒川^(※5)・横山^(※6)君がいたのでいゝ勝負だったが、アンダースローの斎藤先生の球には皆恐れていたっけ…。

(※1) 創立百周年記念誌 『相中相高百年史』 〈1998(平成10)年7月6日発行〉 第四部「思い出の記」より。

(※2) 大野出身。昭和8(1933)年卒。官立京城師範。

(※3) 相中教諭：大正11(1922)年～昭和8(1933)年。

(※4) 相中第4回、明治39(1906)年卒。中村出身。陸士。相中教諭：大正10(1922)年～昭和6(1931)年。

(※5) 荒川は旧姓：酒井忠。昭和8(1933)年卒。大野出身。

(※6) 横山忠良。昭和8(1933)年卒。大野出身。

(転記&※脚注 村山)